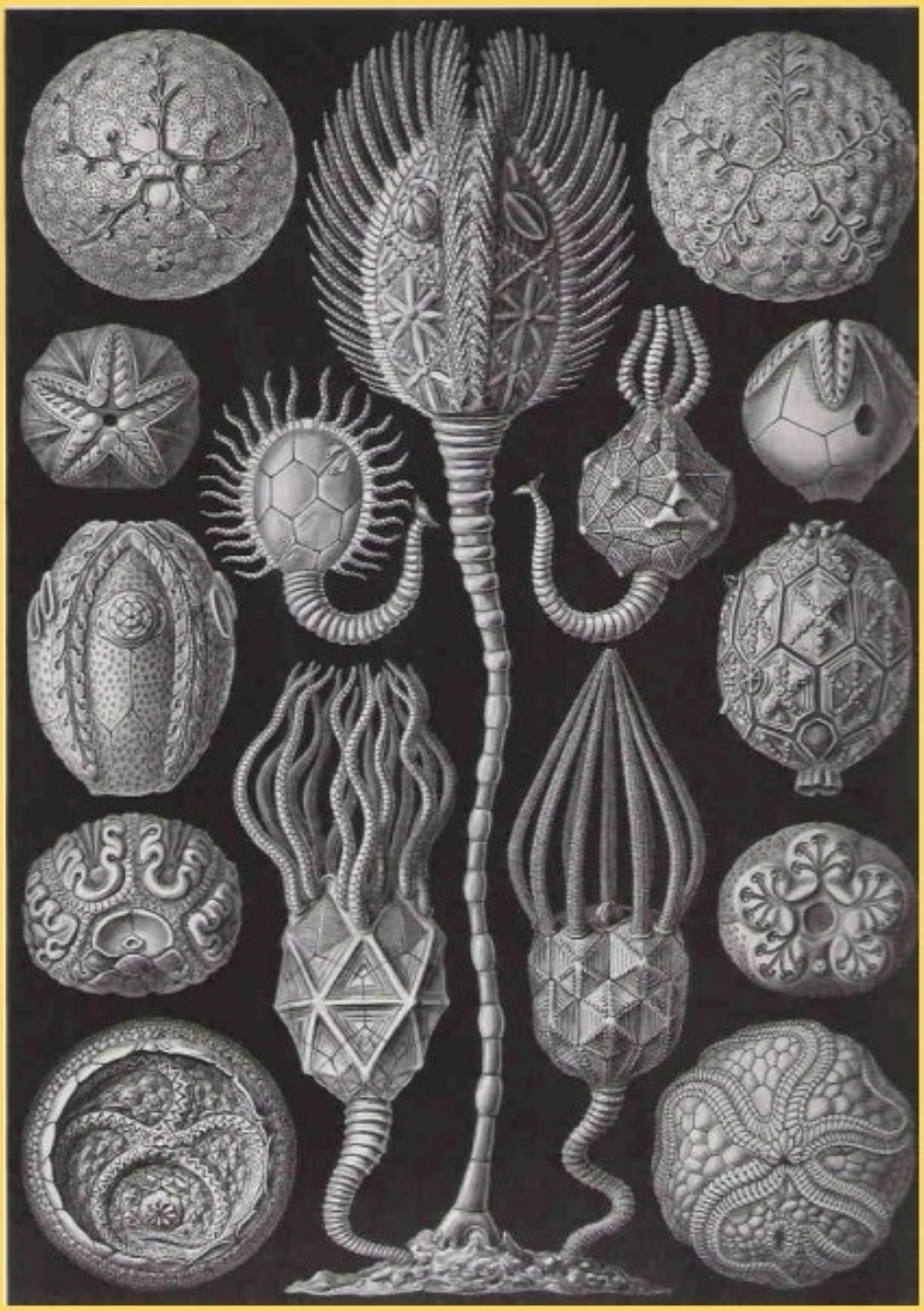
アント・プラネット



夢遊星人

くるえるストーリーズ

アント・プラネット

夢遊星人　作

（１）

「あら、いやだわ」
台所へ入ってきた主婦が、頓狂な声をあげた。昼の残りが、食卓の上に、まだ片づけられないままに、残っていた。ちょうどテレビで連続ドラマが始まったので、食べ残したまま居間に出て、それが終ってからも、あちこちチャンネルを替えているうちに、食欲のことは忘れてしまった。日頃子供にはやかましいママも、独りでいる自由時間には、少しばかり放恣を楽しみたかった。
まだ半分残っているスープや、齧りかけのパンに、どこから集まって来たのか、蟻どもが真黒にたかっている。そしてその塊から、ほとんど切れ目ない条を引いて、まだまだ沢山の蟻が、テーブルの上を、テーブルの脚を、そして床を這い、壁を伝って、半分開いた窓から、続々とやって来る。
その虫酸の走るような赤黒い部隊を見ていると、自然に主婦の肌はゾクゾクして、胃が痙攣を起こしそうになった。
「この前退治したばかりなのに、もう懲りずにやって来たわ。この蟻ちくしょうめ！」
こんな乱暴な言葉を吐いて、人が聞いていなかっただろうかと、主婦は窓の外をうかがった。うららかな、初夏の昼下がりであった。早い蝉が、ジイジイと柿の木で鳴いていた。その柿の木の根もとに、銀色に光るお碗のようなものがあった。
ちょっとみると、大きなコーヒーカップであったが、耳が両側についているので、アラジンのランプをずんぐりさせたようであった。その縁から黒い紐のようなものが垂れて、風に震えているように見えたのは、よく見るとそのお碗から続々這い出してくる、蟻どもであった。
「やつらの船だ」
主婦はしゃがれた声で言った。
主婦は棚から、噴霧式殺虫剤を取った。狙いを定めてボタンを押すと、白い霧が食べ物にたかっている蟻の山の上に、烈しく襲った。蟻どもは一瞬どよめいた。逃げ出すのもあったが、霧に当てられたものどもは、狂おしげなダンスを踊って、それからバタバタと倒れた。蟻どもの倒れるさまを見て、主婦は一層のむかつきを覚えた。

「こいつらは、何て似てるんだろう。気味が悪いくらい」
確かに目を近づけて見ると、これらの蟻どもは変わっていた。身の丈５ミリもないこの蟻達は、二本足で立っていた。それだけではない。頭の天辺から爪先まで、彼女らにそっくりのミニアチュールなのだ。おまけにこいつらは、大黒さんのような袋を背にひっかついでいた。両手で食べ物を略奪すると、その袋に詰めて運び去るのだ。
さらに不快なのは、蟻達は苦しみ蹌きながら、小さい叫びを挙げたことだ。主婦は生き物を殺すことを好まなかった。しかしこの蟻だけは例外だった。彼らの厚かましさ、執拗さは、我慢の限度を越していた。それに生き物を愛しむこととは別に、害虫をほうっておくことは、よき市民の心がけに反したことである、と主婦は思った。彼女は肌の粟立つ不快をこらえながら、彼女の義務を果たしたのだった。
噴き出す霧の下で虫どもは、しばらく悶え、やがて動かなくなった。その屍骸（しかばね）が、テーブルから窓にかけて、累々と転がった。生き残った連中は、必死に柿の木の根もとの方へ逃げていく。さっきまでお碗から吐き出されていた蟻どもは、今度はやはり整然と、一列縦隊に中へ吸い込まれていく。見ていると、五分ほどで、皆中へ収まってしまった。
それから金属の回転する鈍い音がして、お碗がふわりと浮き上がった。それは甲虫が飛ぶように、すいすいと青空に舞い上がり、やがて小さな点になって、靄のような雲の間に溶け込んでいった。

（２）

主婦は蟻の屍骸をディスポーザーで片づけ、庭のものは箒で掃き集めて、塵処理バケツに棄てた。その生き物のこわばった死に様を、なるべく見ないようにした。
そのうち、小学生の娘が学校から帰ってきた。おやつのケーキを貰うと、二階へ駆け上がっていった。主婦は株式チャンネルを見て、内緒にへそくりで買った株を、もっと見こみのありそうな銘柄に変えようかと、ノン・ニコチン煙草をふかしながら思案した。
キャーという、娘の叫びが二階でした。娘はよく何でもないことに叫びを挙げるので、主婦はまたかと思って、気にかけなかった。ママ、ママと喚いて、娘が階段を下りてきた。しょうがないな、と主婦は眉を寄せた。
「小学三年にもなって、いちいちキャーキャー言うんじゃありません」
「だって、ママ、蟻が・・・」
「アリ?」
「ケーキを食べてたら、ブンブン飛んできて、お皿落としちゃったわ」
「畜生、また戻って来たんだ」
主婦は烈しい怒りを覚えた。棚の殺虫剤を手にとった。ついでに目に入った靴べらを掴んだ。どかどかと階段を上がって、娘の部屋に入った。床に皿とケーキが転がっていた。少し離れて窓際に、例のお碗型アラジンのランプが停まっていた。そこから一列縦隊の黒い紐が、壁と床を伝い、うねうねとケーキのところまで達していた。

主婦は靴べらを振りかざして、猛然と踏み込んでいった。こん畜生め、こん畜生めと、赤黒い生き物を叩き潰した。赤い汁が流れて、床に染まった。まるで蚊か蚤を潰した時のように。
いく匹かの勇敢な黒蟻が、靴べらを伝って、彼女の手に這った。ちくちく痛みが走った。彼女の憤怒は、ますます煽られた。それらを指で捻り潰すと、殺虫剤を手にして、お碗のところへ行った。
中を覗きこんだ時、思わず肌が粟立った。直径１５センチ位の円盤の真ん中に、三センチ程の口が開いていて、その縁にも底にも、数えきれない程の赤黒い粒が、うじゃうじゃ蠢いていた。
彼女はその口に、殺虫剤の噴出孔を当て、口が白い泡にうずもれて見えなくなるまで、ボタンを押し続けた。それから取っ手を掴んで、庭へほうり投げた。緑の藻によどんだ池の中に、ちょうど落ちて、ぶくぶく沈んで行った。

（３）

夕食後、環境衛生局に勤める良人に、彼女は蟻の話をした。良人は頷（うなず）いて言った。
「なるほど、家でもそうか。最近、宇宙蟻の被害が、頓（とみ）に酷くなってね。どうやら政府も、蟻退治に本腰を入れることになったようだ。まだ内定だが、私も蟻退治の遠征に選ばれたよ」
「まあ、あなたが。これでお給料も上がってくれると好いんだけど。そしたら、私もう一人子供が欲しいわ」
「うん、かなりの手当てが出ることは確かだ。何しろ奴らの本拠地は、七光年も彼方だからな」
「まあ、そんな遠くから来てるの、あいつら。憎たらしいけれども、随分はるばる飛んでくるのね」
「うん。その点は誉めてやっても良いのだが、奴らはよりによって、我々の星を集中的に狙っているらしいのだ。初めは我々も大目に見ていたんだ。新しい昆虫が一種類増えたぐらいにしか、考えていなかった。奴らも、最初はつつましく、残飯だの、自然物だのを運び出して甘んじていた。奴らが運ぶものは高が知れているし、その程度のものを、宇宙生物にケチケチするまでもあるまいとね。
ところが、奴らはだんだん厚かましくなってきたのだ。奴らがスカヴェンジャー（清掃動物）である間は、まだよかった。近頃では残飯には目もくれず、直接我々の台所に入りこんで、調理したものまで運ぶようになったのだ。その無神経さ、厚かましさは、まるで虫けらと変わりない。
そればかりではない。まだ確かではないが、最近我々のペットが失踪するケースが目立っている。保健局へも問い合わせが来るのだが、無差別に殺処分することはない。大きな家畜までが、森の中で殺されていたりするのだ。血がすべてなくなって、臓器も一部切り取られている。まさかとは思うが、我々の祖先も昔、我々の何十倍もある動物を狩りしていたのだから、考えられないこともない。

とにかく、我々は、奴らが円盤に乗って、はるばる遠くの星からやって来るのだから、ある程度のエチケットをわきまえた高等生物と、最初は見なしていたのだ。彼らとの交流は、スケールの違いからして、始めから困難だったし、その上知性の構造がまるで違うので、不可能であることが分かつた。我々はただ、奴らが人畜無害の生物であることを願ったのだが・・・」

「奴らは有害無益そのものよ」と主婦は言った。

「あんなに小さいくせに、、私たちにそっくりなのも気味が悪いし、やっぱり私たちみたいに、ものを考えるのかしら」

彼女は、昼間彼らの血で赤く染まった指を、無意識に服へなすりつけていた。

「そこなんだよ。今度の遠征のために、奴らの宇宙船を一艘捕らえてみた。奴らの宇宙船は、大きなコーヒーカップに、耳を二つ付けたような形だが、あの中に何と、一万匹近いやつが収まっていたよ。

船体は特殊な合金で、切断するのに手間がかかったが、中は三段に分かれている。底は食物の貯蔵庫、及び我々のとよく似た空間流飛行装置で、それが三分の二を占めている。中断は驚くほど細かい蜂の巣構造になっているんだ。そこに奴等がびっしり詰まっている様を、想像してごらんよ。

上段はフロアーだ。真ん中に穴があるだけで階段がない。奴らの手足には粘着物が付いていて、壁や天井を這い回るんだ。

奴らを特別に工夫した意識測定器にかけてみた。ところが、奴らは労働本能はあっても、意識の方はさっぱりだ。我々と交信するどころではない。奴らは言葉も知らないし、何より思考力が全く欠けているのだ。奴らを動かしているのは本能だけらしい。

そうなると不思議なのは、奴らの飛行技術だ。何か集合知のようなものがあって、彼らのテクノロジーを作り上げたのではないかと考えた。それさえあれば意識がなくても、技術の発展は可能なのだから。ちょうど自然が、無意識に我々の宇宙を作り上げたようにね。

そこで宇宙船をより細かく分解しているうちに、一つの発見があった。蜂の巣構造の一部に、特別頑丈な合金で作られたところがあった。やっとのことで打ち壊してみると、中から他の奴らとは違った、白色の、しかも大きさの三倍はあるやつが二匹出てきたんだ。

それを意識測定器にかけてみた。すると他の連中とは抜群に優れた、知性的生物であることが分かった。顕微鏡で拡大してみると、彼らは雌雄だった。百倍に拡大されてスクリーンに映し出された彼らは、まるで我々を子供の大きさにしたように見えた。

我々は意識翻案器を通じて、彼らと通信を試みた。彼らは我々の意思を充分理解したようだった。しかし、応答を拒否してきた。何度くり返しても、同じ拒否反応だった。まるで我々の意思が、彼らの世界に侵入したウイルスであるかのように。スクリーンに映った顔には、悲壮な決意がうかがわれた。仕方なく、我々は精神操作に移った。まあ一種の催眠誘導だ。錯覚もしくは幻覚を起こさせることで、彼らの防禦意欲を解除させたのだ。その結果分かったことは・・・」

庭の方で、魚が池で跳びはねるような音がした。彼女は耳を澄ました。気のせいか、金属の鈍い唸りのようなものが、窓をかすめたようだった。不快な感覚が、一瞬身体を走った。

「彼らの母星は、我々から７．３光年のところにある、ゾンネという恒星を巡る、エルトとい

うちっぽけな惑星らしいね。その惑星は、我々の星の千分の一もない。しかし彼らの体長では、それで十分だろうというと、そうではないらしく、ここ数百年来大変な人口増加があって、そのため深刻な食糧難に襲われたんだな。その食糧難も単に人口増加のためばかりでなく、気候変動だの、資源の枯渇だの、惑星の老朽化現象が大いにからんでいたらしい。そこで、彼らは大船団を繰りだして、宇宙のノーマドとなったわけなのだ。

面白いのは、彼らの社会構造だ。彼らには二種あって、白い方の少数族が支配階級、黒及び赤褐色の圧倒的多数が、隷属する階級だ。白い方はパルタン、有色の方はアマイゼといって、彼らはこの制度をコムニと名づけている。パルタンは専ら支配し、アマイゼの雄は専ら戦闘に、雌は専ら労役に従事する。この二種はもとから異種族ではなかったらしい。パルタンの方が、集合知を形成するに当たって、自分らと区別するために、アマイゼ族を改造したのであるらしい。

まず色素の区別を遺伝子に施した。アマイゼに生まれた子は、雄は黒い皮膚を、雌は赤黒い皮膚を持つようになった。それからパルタンの肉体的優越を保つために、アマイゼの成長ホルモンを止めて、ある程度以上大きくならないようにした。こんなことが何世代も続けられて、到頭両種族の間に、截然とした精神・肉体上の分業が出来上がったのだ。

肉体の矮小化による労働力の減少を、彼らは数でおぎなった。そのためアマイゼ族の繁殖力はすさまじいものだ。それがひいては、今度の食糧難を招いて、宇宙放浪の原因となったのだな。

彼らの社会は、昆虫と同じように集合知からなっているので、彼らの一人一人と交渉することは、全く無意味なのだ。知性的生物であるパルタンでさえ、個々の存在としては無力で、なんら独立した思考力を持っていないのだよ。彼らは全体として一つの個体なのだ。ところが、我々と違って、集合知には確固とした身体があるわけでない。つまり身体と結び付いた意識を持たないのだ。それで我々としては、彼らと交渉しようにも、全くのお手上げなのだ。彼らの意思は、ただ彼らの本能から推し測るほかはない。

彼ら宇宙蟻は、どういわけか我々の星を集中的に訪れている。この星の気温・風土が、彼らの生息に適しているらしいんだ。奴らはやがては、自分らの母星を棄てて、大挙我々の星に移り住んでくるかもしれない。蜜蜂の群が、一つの花畑に殺到するようにね。それで我々としては、奴らの侵入に前ほど寛大ではいられなくなった。政府が対策本部を設けたのだ。奴らは退治しても、退治しても、宇宙から飛来してくるだろう。

それにこの頃は、この星の上でも繁殖を開始したらしい。蟻塚のような都市を、あちこちに建設している。とりあえず我々は、彼らの基地を探り出して、都市ごと焼き殺しているんだが、最近では地下に潜りだしたので、なかなか発見も難しくなった。

このうえ大挙して母星からやって来られては、我々の方の被害は増すばかりだ。そこで今度の遠征隊を編成して、奴らの母星を破壊する案が出されたのだ。今議会で審議中だが、直ぐに通るだろう。環境衛生局では、すでに予算の見積りも、遠征要員も、内々策定済みなのだ」

（４）

「出発はいつ頃になりますの」

良人のいつもの饒舌に、欠伸を噛み殺しながら妻が訊いた。
「今週中には、議会を通って、出発は来月になるだろうな。早い方が良いのだが、議会では要するに、少数の人道派というのが頑張ってるんだ。奴らはその習性が似ているから、アント（蟻）と呼ばれているけれども、彼らの主張では、奴らは蟻とは別の、立派な文明生物だというのだ。姿形だって、我々とは比較にならないほどちっぽけだが、ちゃんと手足頭脳をそなえた人間ではないかとね。
確かに奴らの大部分は言葉を使わない。しかし我々だって、大昔には言葉なぞ知らなかった。ブラックの方は、少数のホワイトにこき使われる道具のような存在に過ぎないが、元はと言えば、過酷な社会制度から生み出された奇形人なのだ。そしてホワイトの方には、歴とした科学も文明もある。彼らの文明が非常に閉鎖的で、我々とのコミュニケーションを拒んでいることは事実なのだが。
人道派の主張はざっとこんなものだが、しかし結局、アント討伐の方向に大勢は赴くだろう。何と言っても、奴らは宇宙の害虫なのだから。奴らの被害が、このところエスカレートしてるし、奴らへの同情論も薄まるばかりだ」
「一体あんな虫けらどもに同情して、何になるのかしら」
妻は昼間の出来事を思い出して言った。
「世の中には、変わった考えの持ち主もいるからな。奴らを受け入れて、生ゴミ処理に当たらせたらどうかと言う、昆虫学者もいる。それにはホワイトと交渉しなければならないが、全くそのめどは立っていない。奴らはこれまでのところ、どんな話し合いにも反応しないのだ。よっぽど偏屈な生き物なんだな。進化の違いかもしれないが、他の星には、えてしてそんなのが多い」
「そのエルトとかいう星には、どのくらいかかりますの」
「うん、四次元流にうまく乗れば、一月というところだ。もっと速い空間流もあるが、コースから外れるからな」
「まあ、ひと月も。そんなにわたし我慢できないわ」
「なあに、その間、自由恋愛スポーツ・クラブに加入するといい。わたしの方からトラブルがないように、確認書を出しておこう」
「それならいいけど。わたし寂しがりやなの」
妻は甘えるような眼で良人を見た。殺伐とした昼間の記憶が、彼女の心身を燃やしていた。
「今夜はお手柔らかに頼むよ。明日からは、殺虫剤の買いつけに忙しいんだ」
良人は少々辟易気味に言った。

（５）

翌朝のこと、出勤の早い良人を送り出してから、主婦はまだ起きてこない娘の様子を見に、二階へ上がった。扉を開けて、起きなさいと声をかけようとして、声が咽喉に詰まった。娘の部屋は、一晩中小さな明かりをつけているが、少しカーテンが開いて、朝の光が交じっている。娘はベッドの上で半身を起こしていた。母親が扉を開けても、こちらを見ようともせず、窓の方の

何かをじっと見つめている。
「リラちゃん、どうかしたの」
母親は不審に思って、声をかけた。返事はない。母親は娘に近寄って、その顔を正面から見た。娘の顔は一方向を向いたままで、見上げようともしない。そればかりか、体も凝固したように、身動き一つしないのだ。
「リラ、どこか悪いの、病気なの」
母親の声はうわずっていた。やっと蚊の鳴くような小さな声で、娘は答えた。
「ママ、あれがまた来たの」
「え、あれって、まさかアレかい」
蟻と言う言葉を出すのさえ、汚らわしい気がした。
「真っ白な、カイコみたいのが出てきて、じっとリラのほうを見たの。そして、光線をリラに当てたら、動けなくなってしまったの」
「光線だって」
母親は娘の両肩に手を当てた。体全体が硬直したように、ぐらぐら揺れた。
「大変だ。医者を呼ばなくては」
母親は電話機を取ろうとして、娘の学習机に手を伸ばした。その時、窓は閉まっているはずなのに、カーテンの端が風に煽られたように揺らいだ。直感的にそちらを見ると、さっきは気づかなかったが、窓ガラスの一部がきれいに切り抜かれていて、そこから風が吹き込んでいた。そしてその風の中に、あの鈍い金属音が運ばれてきた。あっと思う間もなく、お碗型宇宙船が窓枠に止まっていた。
母親は一瞬、階下にある殺虫剤を取りに下りようと思ったが、娘を置いてはいけなかった。これまで想像もできなかった危険性を、この不気味な虫たちは秘めているような気がして来た。とにかく保健局と病院に、緊急連絡をするのが先決と、頭を回転させた。
携帯電話機が立ち上がるまでに、いらいらするくらい時間がかかった。やっとナンバーを押し始めた時、ふと窓際の蟻どもの宇宙船に目が行った。母親の目は、一瞬そちらに釘づけになった。真っ白な、カイコのようなものが、その縁に這い出して、立ち上がった。大きさ、というよりも身長は二センチもない。それはま白く塗った、ごく小さな人形のようだった。その背中から、蜂か羽蟻のそれのような、透明な羽が伸びてきた。そして空中に飛び立ったのである。
それは母親の一メートルほど手前で、羽ばたきながら空中に停止した。近くから良く見ると、それは昔の子供たちがおとぎ話に聞かされた、妖精のようであった。だが、それよりも母親が気になったのは、その小さな妖精が手にしている、何か銃器のようなものだった。娘の言った光線が頭にひらめいた。とっさに母親は、ナンバーを押すことをあきらめて、緊急ボタンを押した。小学校へ通う娘が、万一の場合に押すボタンで、我が家と、警備局へつながっていた。
次の瞬間、額に一筋の強烈な光を感じた。母親は、携帯を手に持って立ったまま、体中が凝固して、動けなくなっていた。目さえまるで動かせないのである。これはまるで、動物を捕獲する時の麻酔銃ではないか、と母親は思った。ただ思考だけは残されている。連中はこんなふうにして大型獣を捕らえるのか。しかし、それはよそごとではない。

　彼女の視野の隅に、窓枠の上のお碗型宇宙船がとらえられていたが、その縁から黒い紐が垂れ下がり始めている。見ていると雫が伝うように、どんどんと壁から床へと向かっている。床へたどり着いた先鋒は、少しためらうように足踏みして、それから二列縦隊を組んだ。それぞれの隊が二方向へと分かれる。一方は・・・。
　彼女は身動きできないままに、ぎょっとした。娘のリラも、身動きできないままに、ベッドの上で凝固している。一隊は間違いなくそちらを目指している。そして、もう一方は・・・。
　彼女は大声で叫びたかった。しかし、さっき娘がそうであったように、蚊の鳴くような声しか出なかった。黒い紐が流れるように、彼女の足もとに寄ってくる。遠くでサイレンの響きがした。ああ、間に合ってほしい・・・。

（「アント・プラネット」完）